



（耕論）米大統領の広島訪問考 松尾文夫さん、ジェニファー・リンドさん

2016年4月23日05時00分

シェア 80 ツイート list ブックマーク 1 スクラップ メール 印刷

紙面ビューアー | 面一覧

最新の朝刊紙面

東京 2016年06月14日 火曜日

- 地域面紙面
- 天声人語
- 社説



続きから読む

続きから読む



グラフィック・野口哲平



オバマ米大統領が、被爆地・広島を訪れる可能性が現実味を増している。米政府は本格検討に入っており、実現すれば戦後70年をへて、歴史的な訪問になる。日本国内の待望論の一方、米国では慎重論も根強い。オバマ氏の広島訪問の意味と、日米それぞれに与える影響を考える。

■「献花外交」で日米の和解を 松尾文夫さん（ジャーナリスト）

ついに、アメリカの大統領が広島に来るのでしょうか。

長年訴えてきた者としては、ようやく実現する、ありがたいという思いが半分。と同時に、もっと早く来てほしかった、遅すぎる、という思いが半分です。だって、あの戦争が終わって、70年以上もたっているのですよ。

ほとんどの日本人は意識していないでしょうが、日本と米国は目に見える形での和解を果たしていません。戦争で亡くなった人たちのために、お互いにお線香を上げる、祈るといった鎮魂の儀式を行っていないからです。

このことに気づいたのは1995年の2月でした。出張先のワシントンのホテルでテレビのニュースを見ていたら、ドイツのドレスデンで第2次大戦を戦った米英とドイツが、共同で鎮魂の儀式を行っている様子を報じていました。ドレスデンは大戦中、連合軍の夜間無差別爆撃を受け、市民ら3万5千人が亡くなった地です。空襲50年を機に、敵国同士だった政府と軍の代表者が並んで戦没者を追悼し和解の成立を宣言する姿を見て、強い衝撃を受けたのです。日本はまだやっていないぞ、と。

*

そこで11年前の戦後60年の夏、私は「(当時の)ブッシュ大統領に広島原爆死没者慰霊碑に花束を手向けてもらおう」という提案を「中央公論」と米国の経済紙「ウォールストリート・ジャーナル」に寄稿しました。この中で日本の首相には、ハワイの真珠湾を訪れ、献花してほしいとも記しました。鎮魂の儀式、そしてその結果としての本物の和解は、日米共同の作業でなければと考えたからです。

この私のこだわりは、あの戦争で敵としての米国に3回も出会った経験から生まれたのでしょう。

最初は1942年4月の、東京初空襲のドーリトル隊です。小学校の校庭からまぢかに見上げました。四国の善通寺では米艦載機の機銃掃射を経験しました。45年7月には福井市でB29の夜間じゅうたん爆撃を受け、目の前の田んぼに焼夷(しょうい)弾を詰めた爆弾が落ちました。やられたと思いましたが、不発で泥水を浴びただけ。いま生きているのが不思議なほどです。

それに、父が軍人、祖父が2・26事件で反乱軍から義兄の岡田啓介首相と間違えられて殺されるなど、子どものころから戦争を意識する環境の中で育ったことも影響しているかもしれません。

＊

オバマ氏には、ぜひ広島で包括的な演説をしてほしい。「核なき世界」を訴えた2009年のプラハ演説の総括は当然にしても、もう一步踏み込み、依然として完全なものになっていない東アジアの和解に、米国として貢献する決意を示すものであってほしいです。

では日本はどうするか。来た、献花した、よかった、で終えてはいけません。次は日本の番です。日本外交にとって大きなチャンスととらえるべきです。

韓国ではすでにオバマ広島訪問について「日本が加害者という立場を覆い隠す結果につながる可能性がある」という警戒論も出ています。私が日米で提案したときも、米国のアジア系の学者が「一瞬でも日本人が被害者の顔をするのは許せない」と真顔で私に語ったことは忘れられません。

安倍晋三首相にとって、「広島の花束」に「真珠湾の花束」でこたえることは、今も東アジア情勢の根っこに残る日米間の「トゲ」を取り除く意味で、大きなチャンスです。日本は和解する国なんだ、かつての対戦国とも一緒に鎮魂できる国なんだと。

「献花外交」を進めるべきは日米だけではありません。日本が率先して韓国、中国、さらには、当時の戦争にかかわったアジア・太平洋のすべての国に呼びかけてほしい。互いに象徴的な地を訪れようと。もちろんそれで遺恨が急に消えるわけではありませんが、未来に向けた大きな一歩です。(聞き手 編集委員・刀祢館正明)

◇

まつおふみお 1933年生まれ。共同通信でワシントン支局長など。退社後フリーに。著書に「銃を持つ民主主義」「オバマ大統領がヒロシマに献花する日」など。